

# 会員のば

## なんちゃって音楽療法？

札幌市医師会  
在宅療養支援診療所くまさんクリニック

熊谷 範子

アイリッシュハーブを習い始めて3年が経ちました。ハーブとの出会いのきっかけは、在宅医療の研修でした。静明館診療所で在宅医療の専門医取得を目指して研修中、日本在宅医学会（現在の日本在宅医療連合学会）のプログラム交流会という研修会に参加した際、本州のある診療所で研修中の先生がハーブセラピーで癌末期の患者さんのスピリチュアルペインを癒やし、在宅看取りを実現した経験についてまとめたポートフォリオを発表されているのを拝聴しました。演奏技術が未熟であっても、ハーブの音色の波長自体に癒やし効果があるとのことでした。私もいつかハーブの音を聴いてみたいと思うようになりました。無事に専門医を取得させていただいた直後に、早速札幌市内のハーブ教室に無料体験に行きました。ハーブに触れるのは初めてでしたが、その音の美しさに感動し、早速ハーブ教室に通い始めることにしました。いつか自分もハーブで音楽療法をできるようになることを夢見て。

細々と練習を続け、3年がたった今もまだまだ下手くそですが、たまに診療の際にハーブを持参しています。私の下手くそなハーブを喜んでくださった患者さんとの思い出をご紹介します。

患者さんのお名前を仮に太田さんとさせていただきます。太田さんは70代の男性で、脳梗塞後遺症のため運動性失語症と重度の右片麻痺があり、老人下宿で独居生活をされていました。車椅子を自走して、雪道の中でも、一人で外出をされるお元気な方です。脳梗塞を発症する以前はクラリネットを演奏されていたのですが、麻痺が出現してから楽器の演奏はされなくなりました。音楽の趣味は幅広く、クラシックからポップスまで幅広いジャンルのCDをお持ちでした。太田さんは人との関わりを避けるような傾向があり、訪問診療にうかがっても、当初は診療の必要性もご理解いただけず、何とかバイタルサインを測定し、胸部の聴診のみ何とかお願いしてさせていただくような状況でした。訪問しても外出

中で不在のことも何度かありました。特に女性が嫌いで、看護師が体温計を脇の下に挟めようとすると手を振り払うようにして嫌がるような状態でした。あるとき太田さんが歯の痛みを訴えられたことをきっかけに、何とかコミュニケーションをうまく取れる方法を見つけようと当院も努力をし始めました。単語やごく短い文章なら、それを見てご自分の意図するものを指さすことができることが分かりました。その後も少しずつ太田さんの思いを引き出すために、コミュニケーションに時間をかけるようになりました。太田さんも徐々に諦めずに伝えようと頑張ってくれるようになってきました。そのような中、私がハーブを習い始めて1年が経ち、なんとか簡単な曲が弾けるようになり、クリスマスに近い訪問日に小型ハーブを持って太田さんのところに行き、演奏を聴いていただこうと思いつきました。どのような反応が返ってくるかドキドキしていたのですが、思いのほか喜んでくださり、意外にも、何度も何度もリクエストしてくださいました。同じ曲を5回くらいリクエストされることも珍しくありませんでした。ときには指揮をしながら演奏にお付き合いくださり、ときどき私が弾き違えると、笑いながらずっこけたりもしてくださいました。人前で演奏することに慣れていない私はとても緊張していましたが、太田さんが嬉しそうに指揮をしてくださる様子を見ると、不思議と緊張が和らぎました。診察のたびにハーブを持参して演奏を聴いていただいているうちに、当初は体温計を挟めることも嫌がっていた太田さんが、ハーブの演奏のタイミングになると、同行した看護師にも自分の隣に座りなさい、とベッドに座るよう促してくれるようになりました。私にとっても太田さんのところに訪問することが大きな楽しみとなっていました。入居中の老人下宿が閉鎖されることになり、遠方に転居されることが決まり、残念ながら当院は終診となりました。太田さんとの出会いは、私がハーブの練習を続ける上で今でも大きな励みになっています。肝心のハーブの腕前はまだまだ当時と比べてもあまり上達していませんが、これからもぼちぼちと練習を続けて、たくさんの方々に喜んでいただけるようになりたいと願っています。